

Subjective impression and event perception of auditory imagery associated with Japanese onomatopoeic representation

藤沢, 望

<https://doi.org/10.15017/459571>

出版情報 : Kyushu University, 2006, 博士 (芸術工学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :

参考文献

- [1] 金田一春彦, “擬音語・擬態語概説,” 擬音語・擬態語辞典, 浅野鶴子編 (角川書店, 東京, 1978), pp. 3-25.
- [2] 田守育啓, “日本語オノマトペー多様な音と様態の表現ー,” 日本音響学会誌, 54, 215-222 (1998).
- [3] 新村出編, 広辞苑第五版 (岩波書店, 東京, 1998), p. 626, 647.
- [4] “擬音・擬態語で詠む 俳句傑作選,” 暮らしのことば 擬音・擬態語辞典, 山口仲美編 (講談社, 東京, 2003), pp. 582-586.
- [5] “擬音・擬態語で詠む 短歌傑作選,” 暮らしのことば 擬音・擬態語辞典, 山口仲美編 (講談社, 東京, 2003), pp. 587-591.
- [6] 夏目房之介, “擬音から「音喩」へ 日本文化に立脚した「音喩」の豊穡な世界,” 別冊宝島 EX マンガの読み方 (宝島社, 東京, 1995), pp. 126-137.
- [7] “擬音の謎,” 探偵ナイトスクープ [テレビ放送], 朝日放送, 1996.9.13.
- [8] 山口仲美, 犬は「びよ」と鳴いていた 日本語は擬音語・擬態語が面白い (光文社, 東京, 2002).
- [9] 天沼寧編, 擬音語・擬態語辞典 (東京堂出版, 東京, 1974).
- [10] 浅野鶴子編, 擬音語・擬態語辞典 (角川書店, 東京, 1978).
- [11] 白石大二編, 擬声語擬態語 慣用句辞典 (東京堂出版, 東京, 1982).
- [12] 阿刀田稔子, 星野和子, 擬音語・擬態語 使い方辞典 (創拓社出版, 東京, 1993).
- [13] 飛田良文, 浅田秀子, 現代擬音語擬態語用法辞典 (東京堂出版, 東京, 2002).
- [14] 山口仲美編, 暮らしのことば 擬音・擬態語辞典 (講談社, 東京, 2003).
- [15] 阿久津智, 日本語の表現力が身につくハンドブック 絵でわかるぎおんご・ぎたいご A Text for Enriching Your Power of Expressing in Japanese A Practical Guide To Mimetic Expressions Through Pictures (アルク, 東京, 1994).
- [16] 富川和代, 絵で学ぶ擬音語・擬態語カード: らくらく覚えてどんどん使おう 日本語教材 (スリーエーネットワーク, 東京, 1997).
- [17] 田守育啓, ローレンス・スコウラップ, オノマトペー形態と意味ー (くろしお出版, 東京, 1999).
- [18] 丹野眞智俊, オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える 日本語音韻の心理学的研究 (あいり出版, 京都, 2005).
- [19] 日向茂男, “オノマトペの魅力,” 月刊言語, 22(6), pp. 20-25 (1993).
- [20] 大石弥幸, 松本鉄平, 浅井淳, 三品善昭, “純音のピッチと擬音語表現の関係,” 信学技報, TL2003-15, pp. 1-4 (2003).

- [21] ローレンス・スコウラップ, “日本語の書きことば・話しことばにおけるオノマトペの分布について,” オノマトピア 擬音・擬態語の樂園, 笈壽雄, 田守育啓編 (勁草書房, 東京, 1993), pp. 77-100.
- [22] 苧阪直行編, 感性のことばを研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか (新曜社, 東京, 1999).
- [23] E. Sapir, “A study of phonetic symbolism,” *Journal of Experimental Psychology*, 12, 225-239 (1929).
- [24] S. S. Newman, “Further experiments in phonetic symbolism,” *American Journal of Psychology*, 45, 53-75 (1933).
- [25] 宮崎美義, “各種感性経験に於ける照應的特性について,” 心理学研究, 9, 771-792 (1935).
- [26] W. Koehler, *Gestalt Psychology* (Riverright Publishing Corporation, New York, 1947).
- [27] 田中春美, 樋口時弘, 家村睦夫, 五十嵐康男, 倉又浩一, 中村完, 下宮忠雄, 言語学演習 8 版 (大修館書店, 東京, 1991).
- [28] S. Hamano, *The Sound-symbolic System of Japanese*, (CSLI Publications, California, 1998).
- [29] 近藤利恵, “オノマトペ<音韻・形態・韻律>,” 名古屋経済大学経営学部開設記念論集 (名古屋経済大学, 愛知, 2003), pp. 479-502.
- [30] 三戸雄一, 笈壽雄編, 日英対照: 擬声語 (オノマトペ) 辞典 (学書房, 東京, 1980).
- [31] 尾野秀一編, 日英擬音・擬態語活用辞典 (北星堂書店, 東京, 1984).
- [32] リーダーズ英和辞典編集部編, 漫画で楽しむ英語擬音語辞典 (研究社, 東京, 1985).
- [33] アンドルー・C・チャン, <和英>擬態語・擬音語分類用法辞典 A thesaurus of Japanese mimesis and onomatopoeia: usage by categories (大修館書店, 東京, 1990).
- [34] 郭華江編, 日中擬声語・擬態語辞典 (東方書店, 東京, 1994).
- [35] 野口宗親編, 中国語擬音語辞典 (東方書店, 東京, 1995).
- [36] 青山秀夫編, 朝鮮語象徴語辞典 (大学書林, 東京, 1991).
- [37] 村田忠男, “日英語の AB 型オノマトペ・重複形・等位構造表現の関係,” オノマトピア 擬音・擬態語の樂園, 笈壽雄, 田守育啓編 (勁草書房, 東京, 1993), pp. 101-125.
- [38] 角岡賢一, “日本語の「疑似オノマトペー日本語と中国語の接点ー」,” オノマトピア 擬音・擬態語の樂園, 笈壽雄, 田守育啓編 (勁草書房, 東京, 1993), pp. 145-218.
- [39] 苧阪満里子, “擬音語・擬態語の多言語間比較,” 感性のことばを研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか, 苧阪直行編 (新曜社, 東京, 1999), pp. 175-188.

- [40] R. Yanagida, *Un estudio fonético contrastive entre el español y el japonés: Las onomatopeyas de voz y las voces de los animals*, Unpublished master's thesis, Kobe City University of Foreign Studies, Hyogo, Japan (2005).
- [41] 田中喜八郎, 松原謙一郎, 佐藤太一, “異音の表現における擬音語の検討 (衝突音等の単発音やうなり音の場合),” 日本機械学会論文集(C 編), 61, 156-161 (1995).
- [42] 田中喜八郎, 松原謙一郎, 佐藤太一, “機械の異常音の擬音語表現,” 日本音響学会誌, 53, 477-482 (1997).
- [43] 高田正幸, 田中一彦, 岩宮眞一郎, 河原一彦, 高梨彰男, 森厚夫, “擬音語を利用したオフィス機器から発生する音の評価,” 騒音制御, 26, 264-272 (2002).
- [44] M. Takada, K. Tanaka and S. Iwamiya, “Relationships between auditory impressions and onomatopoeic features for environmental sounds,” *Acoustical Science and Technology*, 27, 67-79 (2006).
- [45] 自動車技術会振動騒音部門委員会編, くるまの擬音調査報告 (デジタルオーディオコンパクトディスクセット) (自動車技術会, 東京, 1993).
- [46] 高野靖, 稲葉亨, 佐々木進, “自動車用オルタネータの音質評価技術の開発,” 日本音響学会講演論文集, pp. 749-750 (2001.3).
- [47] 北村音一, 福与和正, 曾田豊二, “擬声語の因子分析的研究 (主として耳鳴音表現のための擬声語の場合),” 日本音響学会聴覚研究会資料, H-82-70, pp. 140-145 (1982.12).
- [48] 曾田豊二, 福与和正, 加藤寿彦, 北村音一, “擬声語の評価について—自覚的表現による耳鳴の評価のために—,” *Audiology Japan*, 26, 96-104 (1983).
- [49] 福與和正, “耳鳴の音色の因子分析的研究—擬声語による耳鳴の客観的評価のために—,” 日耳鼻, 87, 545-556 (1984).
- [50] 耳鳴研究会, “耳鳴検査,” 立木孝, 曾田豊二編, 標準耳鳴検査法 1993 (金原出版, 東京, 1999), pp. 111-116.
- [51] 福與和正, 加藤寿彦, 白石君男, “Ⅲ耳鳴の自覚的表現とその検査,” 立木孝, 曾田豊二編, 耳鳴の検査 (金原出版, 東京, 1999), pp. 17-29.
- [52] 白石君男, 坂田俊文, “耳鳴の科学,” 日本音響学会誌, 61, 708-713 (2005).
- [53] 白石君男, 坂田俊文, 末田尚之, 森本久美子, 福與和正, 加藤寿彦, 曾田豊二, “耳鳴の擬声語表現における音響的特徴と類似性—数量化理論 3 類による解析—,” *Audiology Japan*, 47, 168-174 (2004).
- [54] 岩宮眞一郎, 中川正規, “擬音語を用いたサイン音の分類,” サウンドスケープ, 2, 23-30 (2000).
- [55] 山内勝也, 高田正幸, 岩宮眞一郎, “サイン音の機能イメージと擬音語表現,” 日本音響学会誌, 59, 192-202 (2003).
- [56] 山内勝也, 岩宮眞一郎, “振幅変調音の擬音語表現とサイン音としての機能イメージ,” 日本音響学会誌, 60, 358-367 (2004).

- [57] 山内勝也, 岩宮眞一郎, “周波数変調音の擬音語表現とサイン音としての機能イメージ,” 日本生理人類学会誌, 10, 115-122 (2005).
- [58] 比屋根一雄, 澤部直太, 飯尾淳, “単発音のスペクトル構造とその擬音語表現に関する検討,” 信学技報, SP97-125, pp. 65-72 (1998.3).
- [59] 比屋根一雄, 澤部直太, 飯尾淳, “擬音語表現に基づく衝突音認識システム,” 日本音響学会講演論文集, pp. 135-136 (1998.9).
- [60] 石原一志, 坪田康, 奥乃博, “日本語の音節構造に着目した環境音の擬音語への変換,” 信学技報, SP2003-38, pp. 19-24 (2003.6).
- [61] 石原一志, 駒谷和範, 尾形哲也, 奥乃博, “環境音を対象とした擬音語自動認識,” 人工知能学会論文誌, 20, 229-236 (2005).
- [62] 松本鉄兵, 浅井淳, 三品善昭, 大石弥幸, “純音をあらわす擬音語—ピッチの分布—,” 日本音響学会講演論文集, pp. 443-444 (2003.9).
- [63] 大石弥幸, 梶野哲也, “純音を表す擬音語—発生音の分析—,” 日本音響学会講演論文集, pp. 407-408 (2006.3).
- [64] 大石弥幸, 三品善昭, “純音を表す擬音語—性別, 年齢による違い—,” 日本音響学会講演論文集, pp. 289-290 (2006.9).
- [65] 和田章芳, 中嶋鴻毅, “擬音語音声の分類におけるニューラルネットワークへの適用,” 日本音響学会講演論文集, pp. 403-404 (2003.9).
- [66] 加藤裕一, 小椋理絵, 山口静馬, “擬音語を利用した音色評定システムの提案,” 日本音響学会講演論文集, pp. 725-726 (2003.9).
- [67] 筧寿雄, 田守育啓編, オノマトピア 擬音・擬態語の楽園 (勁草書房, 東京, 1993).
- [68] 大串健吾, 中山剛, 福田忠彦, 画質と音質の評価技術 (昭晃堂, 東京, 1991).
- [69] 日科技連官能検査委員会編, “シェッフエ法の変形”, 新版 官能検査ハンドブック (日科技連出版社, 東京, 1976), pp. 366-385.
- [70] 高田正幸, 田中一彦, 岩宮眞一郎, “環境音に対する印象と擬音語表現の関係,” 日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集, pp. 49-52 (2003.9).
- [71] 北村音一, 難波精一郎, 三戸左内, “再生音の心理的評価について,” 電気通信学会電気音響研究専門委員会資料 (1962).
- [72] 北村音一, 飯田茂隆, 佐々木実, “系列範ちゅう法による音色間隔尺度値,” 電気通信学会電気音響研究会資料 (1965).
- [73] 北村音一, 二井真一郎, 栗山譲二, 増田昇, “昭和 50 年代の青年に関する音色因子の抽出,” 音響学会聴覚研究会資料, H-51-11 (1978).
- [74] 国際音声学会編, 国際音声記号ガイドブック (大修館書店, 東京, 2003).
- [75] 小泉保, 音声学入門 (大学書林, 東京, 1996).
- [76] 城生佰太郎, 日本語音声科学 (バンダイ・ミュージックエンタテインメント, 東京, 1998).

- [77] 駒澤勉, “数量化理論第I類,” 数量化理論とデータ処理, 林知己夫監修 (朝倉書店, 東京, 1982), pp. 10-48.
- [78] R. S. バーリントン, D. C. メイ原著, 林知己夫, 脇本和昌監訳, 確率・統計ハンドブック 付: 統計数値表 (森北出版, 東京, 1975).
- [79] 田守育啓, <もっとしりたい! 日本語>オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ (岩波書店, 東京, 2002).
- [80] G. von Bismarck, “Timbre of steady sounds: A factorial investigation of its verbal attributes,” *Acustica*, 30, 146-159 (1974).
- [81] 栗山譲二, 二井眞一郎, 北村音一, “純音の音色の因子分析的研究,” 日本音響学会講演論文集, pp. 657-658 (1979.3).
- [82] 大串健吾, “複合音の音色を支配する物理的・心理的要因について,” 日本音響学会誌, 36, 253-259 (1980).
- [83] 北村音一, “音色の内容について,” 日本音響学会聴覚研究会, H-92-74, 1992.
- [84] 難波精一郎, “環境研究上極めて重要なテーマを科学的に解説した— 音色の測定・評価法とその適用例 (応用技術出版, 東京, 1992).
- [85] W. W. Gaver, “What in the world do we hear?: An ecological approach to auditory event perception,” *Ecological Psychology*, 5, 1-29 (1993).
- [86] W. H. Warren Jr., R. R. Verbrugge, “Auditory perception of breaking and bouncing events: A case study in ecological acoustics,” *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 10, 704-712 (1984).
- [87] M. Ishibashi, A. Preis, “Psychoacoustic estimation of differential mass threshold,” *Proceedings of Forum Acusticum*, pp. 1671-1675, Budapest, Hungary (2005).
- [88] E. Zwicker, H. Fastl, *Psychoacoustics-Facts and models (2nd ed.)* (Springer Verlag, Berlin, 1999).
- [89] R. P. Wildes, W. A. Richards, “Recovering material properties from sound,” in *Natural computation*, W. Richards Eds. (MIT Press, Cambridge, 1989), pp. 356-363.
- [90] 岩瀬昭雄, 阿部司, 真秀豊, “音響・振動によるコンクリート構造物のひび割れ剥離の非破壊診断方法,” 日本機械学会・日本音響学会共催シンポジウム, pp. 121-124 (2000.3).
- [91] K. W. Berger, “Some factors in the recognition of timbre,” *The Journal of the Acoustical Society of America*, 36, 1888-1891 (1964).
- [92] E. L. Saldanha, J. F. Corso, “Timbre cues and the identification of musical instruments,” *The Journal of the Acoustical Society of America*, 36, 2021-2026 (1964).